

2022 年度春季 大阪大学言語文化学会 第 60 回大会

2022 年 6 月 30 日 (木) 於 大阪大学 豊中キャンパス

発表要旨

「は」を含む文末形式のモダリティ — 「～シハシナイ」を中心に—
山倉 佐恵子

本稿は、日本語の「動詞連用形+はしない」という表現を、助詞「は」を含む文末詞「シハシナイ」として定義し、モダリティとしての用法があるのではないかとすることを論考する。助詞「は」の用法は従来対比と主題提示の二つだとされている(尾上 1995:28、日本語記述文法研究 2009: 175 など)。しかしこの二つの用法には当てはまらないとされる例が、多くの先行研究で指摘されている(尾上 1995:35 など)。

例えば尾上(1981:110)は「昨日教科書を読みはした」の「は」に対して「対比の色、特に”譲歩的”な気持ちが強くなる」と主張している。青木(2002:273)は「知っていれば雨がふるのに岩のほうまで行きはしないわ」という例などに「対比はもちろん、もはや譲歩のニュアンスも感じられない」と述べている。しかしこれらの動詞に直接、接続する「は」というのは多くの実例が存在する。もし「は」が、本来の意味が薄まっただけなのであれば、その必要性自体も薄くなり、ひいては使用の頻度も減少するだろう。本稿では、それにも関わらず「動詞連用形+は」の形がよく用いられるということに関して、薄まった意味を補う別の役割を持っているからだと考えた。先行研究の例を含め、この「は」は否定形に前節している場合が大半である。そのためこれらを「動詞連用形+は+ない」で構成される、「シハシナイ」という一連の語句として研究の対象の中心とする。

シハシナイは助詞「は」の排他的取り立て機能を含み、話者の認識的な態度を表すモダリティとしての用法があると考えられる。このような意味機能は、「モダリティ否定」と呼ばれる、命題内容に対して、否定的な認識態度を表す用法(澤田 2006: 277)に当てはまると考える。

以上のように今回の発表では、シハシナイが独自の意味をもち、モダリティの性質、用法を持つことを確認していきたい。

JSL 環境の中国人日本語学習者にみられる転移現象 — 語彙面における第二言語から母語への転移に焦点を当てて — 呂 倬菡 (ロ タクカン)

近年第二言語として習得した言語形式が学習者の母語、或いは第一言語の使用や認知などに影響を与えるという報告が多くされている。その中で、英語をはじめとするヨーロッパ言語を第二言語として、他の言語(主にヨーロッパ言語)への転移に関する研究が盛んに行われている(羅, 2015)。第二言語とする日本語から母語とする中国語への転移に関する研究はまだ少ないが、応募者の周りの中国人日本語学習者は、実際に使用している中国語(母語)に日本語(第二言語)の語彙を挿入する様子がしばしば観察される。このような母語をベースとして行われる発話への第二言語の語彙の挿入は「逆向転移」(羅, 2015)とよばれ、目標言語から母語への影響とされている。本研究では、JSL 環境における中国人日本語学習者の語彙面の逆向転移に焦点を当て、具体的にど

のような逆向転移が起こるかを明らかにし、語彙面に見られる逆向転移がもたらす影響を考察したい。そのため、「逆向転移」に関するアンケート調査と自然会話録音調査を行い、話し言葉を中心に検討し、主に1)語彙の借用、2)語彙の意味混用、3)語彙の発音混用という三つの現象を発見した。このような語彙面における「逆向転移」によって、中国人日本語学習者の同形語の習得・運用に多かれ少なかれ負の影響（日中両言語の意味領域の混乱の発生や化石化など）を与える可能性がある。一方、「ゼミ」のような中国語では日本語特有のニュアンスが伝わりにくい日本語語彙を中国語の会話で使用することが、JSL環境における中国人日本語学習者がお互いに意思疎通をはかることに役に立ち、よりコミュニケーションの円滑化に促進する効果があると考えられる。

日本アニメーションの受容と自己物語の形成—中国の「90後」世代を対象として 丁 思文（チヨウ シブン）

「90後」とは、一般的に中国の1990年代生まれの世代を指す言葉である。彼らは豊かな環境で育ったが、「集体主義」などの伝統的な価値観への反発、親の過保護と親からのプレッシャー、対人関係における障害などの理由で、現実に対して不満を感じており、その解消のために他者とは異なる個性的な自我を語ろうとする欲求をもっていると考えられる。自己の物語は、親や学校から押し付けられるドミナントストーリーではない。他者とは異なる自己物語を持てれば、家庭や学校の規律訓練を避けることができ、自分で自分の人生を決定できる——「90後」はこのように考えたのではないかと想定される。しかし、毎日他の人と同じ学生生活を過ごしている「90後」には、自ら個性的な自己物語を語ることは難しい。それ故、つくられる文化産物が提供してくれる完成した物語を受け取り、受容した物語によって自己を語り、個性的な自我を語る欲求を満たそうとするのではないだろうか。今回の発表では、そうした事象のうち、とりわけ日本アニメーションの受容を通じての自己物語の形成に注目したい。

日本アニメーションの受容と「90後」世代の自己物語の形成との関わりを探究するために、今回の発表を二つの部分から構成したい。まず、なぜ「90後」世代は個性的な自己物語を語りたのか、そして、なぜ自分ではこのような自己物語を語りえないのか、その社会的な要因を分析する。さらには、「90後」世代は日本アニメーションの受容を通してどのような自己物語をつくらうとしたのか、そして、政策と主流となる価値観はこの自己物語にどのような影響を与えたのか、この二つの問いを考察したい。

技能実習生に関するメディアの言説から見えてくるもの ——ベトナム人技能実習生に注目して—— 王 滢鵬（オウ エイコウ）

2021年6月末現在、日本における技能実習生の総数は約35万人となり、国籍別では、ベトナム人が約20万人で最も多い(出入国在留管理庁)。しかし、ベトナム人技能実習生の増加に伴い、彼ら・彼女らを取り巻く社会課題も顕在化しつつある。例えば、ベトナム人技能実習生は高額な費用を負担して来日するため、その借金が返済できなくなると、不法滞在になるケースがある。また、2021年末の段階で、新型コロナウイルスの感染拡大により、技能実習生の受け入れ会社の多くは経営難となっており、技能実習生をめぐる不当解雇や雇用差別などが頻発し、ベトナム人を含めた技能実習生たちはさらなる苦境に追い込まれている(鈴木2021；斎藤2021)。

技能実習生に対する一般的な意識の形成において、メディアは重要な役割を演じている。ただし、メディアが現実の一部をきり取って再構成したものを伝えているため(今村2017)、その言説には意図的な隠蔽や情報操作という一面があると言えよう。加えて、世論もメディアによって大

きく左右される場合があると思われる。しかしながら、技能実習生に関するメディアの報道を分析・検証した先行研究は非常に少ない。そこで、本研究では、近年その数を急速に増加させたベトナム人技能実習生を例に、それに関するメディアの報道の問題を取り上げる。

2020年、最も利用されているテキスト系ニュースサービスの順位では、「ポータルサイトによるニュース配信」の利用率が最も高い(総務省情報通信政策研究所)。それゆえ、本研究はポータルサイトであるYahoo!とGoogleが配信するベトナム人技能実習生の関連ニュースを研究対象として、メディアがどのようにベトナム人技能実習生を語っているのかを分析・考察する。